

F-61 当科における非喫煙者原発性肺癌の検討

順天堂大学呼吸器内科

○長岡鉄太郎、桜庭晶子、高橋和久、蓮沼紀一、佐藤一彦、高橋英気、檀原高、福地義之助

【目的】原発性肺癌は喫煙との関係が深いことが知られているが、頻度は低いが非喫煙者にも発症する。その特徴を把握するために、当科に入院した非喫煙の原発性肺癌を retrospective に検討した。

【対象】1985年から1997年までに当科に入院した原発性肺癌878例中、非喫煙者163例を対象とした。

【結果】原発性肺癌における非喫煙者は、男性では全肺癌668例中38例(5.7%)、女性では210例中125例(59.5%)で、男女比は1:3.3であった。平均年齢(年齢範囲)は各々58.7(34-87)歳、63.6(37-90)歳であった。組織型では男女とも腺癌が最も多く、136例82.9%であり、扁平上皮癌は10例6.1%、小細胞癌は12例7.3%と少なかった。悪性腫瘍の家族歴を有する症例は157例中56例35.7%、重複癌は163例中7例4.3%に認められた。臨床病期は、I期37例(22.7%)、II期3例(1.8%)、IIIA期13例(8.0%)、IIIB期24例(14.7%)、VI期84例(51.5%)であった。

【結語】①非喫煙者の原発性肺癌は喫煙者の原発性肺癌とは逆に、男性より女性に高頻度にみられた。

②組織型では、腺癌が82.9%と高率に認められた。

F-63 新潟市肺癌住民検診二次精検における長期経過観察例の検討

新潟大学放射線科¹、国療西新潟中央病院²

○石川浩志¹、古泉直也¹、酒井邦夫¹、斎藤友雄¹、森田哲郎¹、奥泉美奈¹、木原好則¹、松月由子¹、小田純一²

【目的】新潟市肺癌住民検診二次精検における長期経過観察例において、その理由と傾向、対策を検討する。

【対象】平成元年度から平成8年度までの新潟市肺癌住民検診において、新潟大学医学部付属病院放射線科で二次精検を行った869例のうち、10ヵ月以上の経過観察を行った31例を対象とした。【方法】対象を長期経過観察の理由から、活動性肺結核の否定を目的とした「炎症群」5例、炎症が疑われるが肺癌の否定を必要とした「炎症 or 腫瘍群」8例、肺腫瘍(細気管支肺胞腺腫/細気管支肺胞癌)と考えられるが精検困難もしくは本人の希望により経過観察された「腫瘍群」13例、および「その他」5例の4グループに分類し、その年次推移を検討した。【結果】初期に多くみられた「炎症 or 腫瘍群」の経過観察例はCTガイド下経皮肺生検の精度向上に伴い減少傾向にあった。一方、近年高分解能CTの多用に関し「腫瘍群」の経過観察中特に細気管支肺胞腺腫/細気管支肺胞癌と考えられたが精検困難のため経過観察した症例が急増傾向にあり、その対応方法の確立が急務と考えられた。

F-62 長崎県がん登録による肺癌の動向

長崎大学第二内科¹、放射線影響研究所²

○早田 宏¹、早田みどり²、長島聖二¹、岡 三喜男¹、河野 茂¹

【目的】肺癌罹患・死亡の正確な評価を行い、今後の肺癌対策の基礎的資料とする。

【対象・方法】1985~1994年の10年間に長崎県がん登録に集録された20~79歳の肺癌5914例(男性4325例、女性1589例、死亡票のみの登録11%)について性・年齢・組織型別に罹患、死亡の評価を行った。

【結果】全年齢での組織型分布(Adeno / Squamous / Small / Large / Unkown)は、男性32% / 30% / 12% / 4% / 20%、女性58% / 11% / 6% / 2% / 21%で、男性においては扁平上皮癌、小細胞癌が多かった。60歳以上の肺癌は全体の83%を占め、組織型分布は男性30% / 31% / 12% / 3% / 22%、女性55% / 11% / 8% / 2% / 23%であった。40歳未満の肺癌は全体の1%で、組織型分布は男性51% / 11% / 3% / 11% / 22%、女性72% / 4% / 4% / 0% / 16%であった。肺癌罹患数は加齢とともに増加するが、扁平上皮癌、小細胞癌は腺癌に比べて高年齢層に分布していた。この10年間に男女とも全肺癌罹患数は漸増し、組織型では腺癌が漸増していた。全肺癌死亡数も増加していたが、とくに腺癌において死亡数の増加が著しかった。

【結論】腺癌死亡の増加が著しいことより、今後は新たな腺癌対策が必要と考えられる。

F-64 中野区肺がん検診10年の歩み

国立国際医療センター¹、中野区肺がん読影委員会²

稲垣敬三¹、鈴木恒男¹、森田敬知¹、矢野 真¹

野村友清¹、伊藤秀幸¹、岡田公寿²、山本 登²

三五正一²、井上 皓²、荒井他嘉司²

【目的】1987年以後、中野区肺がん検診10年間の成績を報告する。

【方法】中野区方式は、40歳以上の希望者を対象とし、1次検診は検診車巡回による間接撮影を行った。1次検診で肺癌疑いとされたものは、中野区医師会登録医療機関にて2次検診となる。なお2次検診の結果と第1次検診で極めて肺癌疑いの可能性が高いものは、即精密検査としての第3次検診を行った。

【対象ならびに成績】10年間の第1次検診の総受診者数は59705名で、第2次検診者数は1186名(2.0%)、第3次検診者数318名(0.5%)、肺癌発見数25名であった。肺がん発見率は、人口10万対41.9であった。前半の5年と後半の5年で見ると、前半では26.9であったのに対し、後半5年では56.7と上昇してきている。ちなみに平成8年度の発見率は81.6であった。なお男女における発見率は、過去5年間のもので、男性137.1に対し女性21.9と有意に男性の発見率が高かった。

【結語】中野区肺がん検診10年間の成績は、ほぼ全国平均のレベルに達しており十分にその意義を果たしてきたと考えられる。なお男性に比較し女性の発見率が有意に低かった。